

沢口孝子作 「初めに神は」

牧野綾子・五十嵐智子 ごめんください。

手芸屋のおじさん ああ、綾ちゃんじゃないか。久しぶりだねえ。お母さん、お元気？

綾子 うん、相変わらずよ。

おじさん そう、よかったね。ところで今日は何を買いに来たの？

綾子 今日はねえ、友達と二人で毛糸買いに来たの。こちらがわたしと同じクラスの五十嵐智子さん。

おじさん いらっしゃい。気に入ったの見ていっておくれ。

智子 はい。

ナレーション 牧野綾子と五十嵐智子は、青春中学1年生。2学期に入って間もなく、智子が風邪で休んだ時の勉強を綾子が手伝ってあげたことから、とても仲良くなったのです。二人は、冬休みの間に一緒にセーターを編もうと相談し、冬休みに入るとすぐ、こうして綾子の行きつけの手芸屋さんのお店にやってきたのです。二人はいろいろと選んだ末、それぞれ自分たちの気に入った毛糸と材料を買いました。

綾子 おじちゃん、今日はどうもありがとう。お陰ですてきなセーターが編めそう。出来上がったから見せに来るからね。

おじさん ほんとかい。それじゃ楽しみに待ってるから。春にでもなったらできるかねえ。

綾子 あ～あ、おじちゃん。それはちょっとひどいな。あと1か月したら必ず来るから。

おじさん それじゃ、気をつけて帰るんだよ。そうそう、お母さんに、たまにはお茶菓子でも持って遊びにおいでって言うておくれ。分かったかい？ それじゃさよなら。

綾子 はい。それじゃ、(綾子・智子)さよなら。

効果音 (手芸屋の戸を閉める音。街の雑踏)

智子 気さくなおじさんね。

綾子 そうなのよ。とっても陽気で、たまにうちに遊びに来るんだけどね。お母さんと二人だけで話してるとは思えないほど、すごいにぎやかなんだから。

智子 綾子のお母さんも陽気だもんね。ところでさ、わたし大丈夫かなあ。

綾子 何が？

智子 何がって…。綾子は器用だからセーターでもすぐ編めるだろうけど、わたしなんてぶきっちょだからマフラーしか編めないよ。

綾子 大丈夫だってば。マフラーが編めたらセーターだって同じことだよ。わたしがついてるじゃない。それに、おじちゃんも一緒に毛糸探してくれたんだし。やってみなくちゃ分かんないよ。

智子 うん、それもそうね。

ナレーション 智子は、綾子に言われてようやくやる気を出し、あした、綾子の家でセーターを編む約束をして別れたのでした。

効果音 (智子の子の戸の開閉)

智子 ただいま。

母親 お帰り。あら、智子、何買ってきたの？

智子 あ、これ？ なんだと思う？

母親 さあ、何かしらねえ。

智子 わたしもね、女らしくしようと思ってさ、毛糸買ってきちゃった。

母親 またマフラー編むの？

智子 今度はセーターに挑戦するんだから。すごいでしょ。綾子が教えてくれるって言うの。だから、あした綾子の家に行ってくるね。

ナレーション そして次の日、智子が綾子の家に来たのは、あの病気のあとの、勉強を教えてもらいに来た時以来、2度目でした。二人は今、コタツに入りながら、楽しくおしゃべりをしてセーターを編んでいます。

音楽 (ラジオのクラシック)

綾子 思ったより難しくないでしょう？ 一目ゴム編みを16段編んだら、次は身ごろ編むから12号針に変えるんだよ。

智子 うん、分かった。でもわたしがセーター編めるなんてびっくりしちゃうな。やっぱりやってみなくちゃ分かんないね。

綾子 そうでしょう。ね、少し休まない？ ミカンでも食べようよ。はい、つまんで。

智子 うん、ありがとう。このミカン、とっても甘いね。

綾子 うん、おいしい。

智子 綾子の家には本がいっぱいある。

綾子 そうなの。本が好きだから、いつの間にかこんなにたまっちゃった。読みたいのがあったら貸してあげるよ。

智子 うん。あ、絵本もある。これは？ すごく分厚い本だね。きれいにカバーかけてある。

綾子 あ、それは聖書。

智子 聖書？ あ、そうか。綾子、教会に行ってるんだもんね。

ナレーション 智子は、数日前のクリスマスに、綾子に教会のクリスマスに来るように誘われていたのを思い出しました。その時も、風邪で行けなかったのです。今、初めて智子は聖書を開いてみました。そこには、色鉛筆で至る所に線が引いてあり、一目で綾子の愛読書であることが分かりました。

綾子 6年生の時、近所にいとこのお兄さんがいて、クリスマスプレゼントにこの聖書をくれたの。それから教会へ行くようになったわけ。初めは、読んでてもあまりピンとこなかったのね。でも、中学に入って間もなく、小学1年の時からずっと

一緒だった友達がね、「クラスが違って、同じクラブに入って一緒にやろう」って約束してたのに、ほかに友達ができて、わたしに黙って、バスケットに入っちゃったの。すごいショックでね、何日も悩んで、その子に恨みの手紙出したり、わざと意地悪したり…。でも、そんな自分がたまらなくイヤだったのよね。そんな時に、いとこのお兄さんが、こんなこと言ってくれたの。

いとこ ああ、綾ちゃんは、自分の醜い心や意地悪な心が、“罪”であるってことが分かって悲しんでるわけだ。でもさ、神様は、綾ちゃんの罪が緋のように真っ赤でも、雪のように真っ白にしてくれるし、^{くれない}紅のように真っ赤でも、羊の毛のように柔らかな、あったかい心にしてくれるんだぜ。

綾子 …それからね、いとこは聖書を開いて、こんなわたしの、自分中心の心を変えてくださるために、イエス様は、十字架の上で身代わりに死んでくださった。このお方を信じれば救われる、ってことを、はっきりと話してくれたの。その時は本当にうれしかった。

智子 ふーん。

綾子 そうだ、智子に聖書あげる。もう1冊あるんだ。

智子 えー、ほんと？

綾子 うん。クリスマスプレゼントに、あなたにあげようと思ってたんだけど、来られなかったでしょう、智子。ちょうどよかった。えーと、どこにしまってたかなあ。あ、あった！ はい。(智子に手渡す。)

智子 ほんとにいいの？

綾子 もちろんよ！ これはわたしからのプレゼントじゃなくて、神様からのプレゼント。

智子 どうもありがとう。

ナレーション これが、智子と聖書の、初めての出会いでした。そして、神様との出会いでもあったのです。その日、智子は初めてセーターを編んだ喜びと、聖書を手にした喜びで、心はあふれていました。というのは、聖書には、自分の知らない神様のことが書かれてあり、綾子があんなにうれしそうに話す神様のことを、自分も知りたくなったからでした。

効果音 (智子の家の戸の開閉)

智子 ただいま。

母親 お帰り。遅かったわねえ。

智子 うん。ちょっと話が弾んじゃってさ。でも、セーターたーは少し編んだよ。それじゃ、お母さんにも見せてよ。

智子 はいはい。セーターの形には程遠いけど、マフラーには見えないでしょ？

母親 結構きれいに編めてるわね。

智子 ありがとう。お母さんにそう言ってもらえるとうれしいな。

ナレーション 智子は、あたふたと階段を上り、部屋に入り、早速聖書を読み始めました。

智子 (読む)「初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが
大いなる水の上にあり、神の霊が水の上を歩いていた。その時、神が『光よあ
れ』と仰せられた。すると、光ができた。」(モノローグ)へえ、こんなことってあ
るのかなあ。この世界は神様が作ったの？ 神様の言葉で？ 学校で習って
たことと違うけど、でも、この世界のすべてものが、偶然に、しかも、アメーバな
んかから分かれてできた、なんていうのより、なんだかこのほうがずっとすばら
しい気がする。「初めに神が天と地を創造した。」もし、神様がいて、その方が、
綾子が言ってたように、全知全能だったら、確かにこの地球も宇宙もすべてつ
くることができるはずよね。すると… このわたしも神様につくられたのかなあ。

ナレーション 智子は、不思議な感動を覚えながら、なおもパラパラめくっていると、しおりが
挟んである所に来ました。

智子モノローグ あれ、しおりが挟んである。綾子かなあ。えーと、「だれでもキリストにあるなら
ば、その人は新しくつくられたものです。古いものは過ぎ去って、見よ、すべて
が新しくなりました。」キリストにあるならば、新しくつくられたもの…。古いもの
は過ぎ去って…、ということは、神様はわたしをつくってただけでなくて、も
う一度新しく作り変えるってことかなあ。

音楽 (エンドミュージック)

智子モノローグ 「キリストにあるなら」。そういえば、「イエス様を信じて、新しく生まれ変わった
んだ」って綾子言ってたっけ。ほんとにそんなことってあんのかなあ。でも、神
様が全能なら、わたしのことだって、綾子のように…。

ナレーション 智子は、なんだか心の中の世界が、無限に広がっていくような、また一方では、
今まで考えたこともなかった神様が、イエス様と重なって、自分の身近にいる
ような、不思議な気持ちになりました。

智子モノローグ 空を見てみよう。あ、雪だ。この冬初めての雪。

母親 (階下から)智子、ご飯よ。

智子 (階下に)お母さん、雪よ！ 初雪！

ナレーション 智子は、両手を差し出すと、まるで吸い込まれるように、いつまでも夜空を見
上げていました――。

音楽 (高まって)

<完>